

再校

## 「東京」— 社会言語学的過程としての / 社会言語学的経験としての

パトリック・ハインリッヒ

訳：塚原 信行

### 1. 社会言語学的「東京」とはなにか

おそらく、東京の都市社会言語学に関する一章を始めるのもっとも良い方法は、「東京」の正確な意味を明らかにすることだろう。これは、社会言語学の立場に立つ本稿からすると、東京が社会言語学的にどのように構築されているのかという問いである。この「東京」は、行政、交通、インフラ、経済などにおける「東京」とは異なる。もちろん、行政、経済、交通といった事柄は、個人のコミュニケーションのあり方に影響する要素という意味では重要である。しかし、考えてみればわかるように、そうした要素は数限りなくあり、たとえば、「離婚経験」「年齢」「ペットの数」なども該当する。したがって、東京が社会言語学的な独自性を持つ空間となっているのは、発話に影響する要素が無限に増殖しているからではない。社会言語学的に言えば、東京とは、特定の社会的コミュニケーション過程の帰結としか表現しようがない。東京のような都市は、コミュニケーション上の対立と問題が生ずる場所であり、争いが生じては収まり、あらたな社会言語学的解決策と慣習が根づいていく場所である。それゆえ、必要なことは、東京におけるこうしたコミュニケーションの本質をとらえることである。言いかえれば、「東京的」コミュニケーションを定義するために十分な条件とはなにかを明らかにすることである。

これは決して簡単な仕事ではないが、他分野における都市研究のアプローチが大きな助けとなる。それらの都市研究に基づき、都市一般の特徴を確認しつ

つ、東京のような場所の特異性を考えることにしてみよう。

- (1) まず、人口の集中を示す「World Stable Lights」のデータがある。この人口集中は（幸いにして）国境やその他の行政的境界に沿ったものではない（北本 日付なし）。このデータからは、東京周辺の人口集中は東京周辺で完結せず、東は茨城県から西は福岡県にかけ、いわゆる「太平洋ベルト地帯」沿いに、ほぼ切れ目なくつながっていることがわかる。東京は巨大ネットワークの一部である。
- (2) 東京のような極大都市は、国内的にも国際的にも、行政、政治、貿易、ビジネス、宗教、文化、芸術などのハブとして機能する。そのため、周辺の地域や国家から多数の訪問者を引き寄せる。この機能のため、都市は明確に規定された地理的人口の実体というよりも、ネットワークの一結節点（ノード）として存在する（Marshall 1989）。東京は、大規模で多機能多面的かつ多国籍なネットワークの中心的結節点である。
- (3) 上記 (1) (2) の結果として、都市はよそ者同士が出会う場所となる。「都会人はよそ者である」（Simmel 1971 [1903]）。都市は大きく、その人口は多く、移民と学生を引き寄せ、社会的に階層化された社会を内包する。「よそ者都会人」は都市で接触状態に入り、一人ひとりが互いに共存する術を学ばなければならない（Sennett 1969）。東京は、ありとあらゆる面において多様性が見出され、予期せぬ困難と対立がいつ生じても不思議はない場所である。
- (4) 都市は、都市特有の行動で満たされている場所である。「よそ者都会人の共同体」での生活によって生じる可能性がある問題は、実際に都市で生じ、解決されていく。都市は意味に満ち溢れた空間だが、日々の生活において、意味は議論の対象となり、常に（再）生産され、加工され、変質する（De Certeau 1988）。場所は、特定の「世界を理解する方法」である（Cresswell 2004: 11）。人々は、単に都市に「いる」「いない」のではない。そうではなく、「ある場所にいる」ことの意味は、交渉され、従来からの住民を含む、あらゆる人によってあらたに経験される。「コスモポリ

タンな都市では、たとえその都市の生まれであっても、人は自分をよそ者のように感じる」（Deprez 2017: 160）のである。東京では、あらゆる時とあらゆる場所で、あらゆる人に対して、予期せぬ出来事が生じうる。

要するに、東京におけるコミュニケーションは、それ以外の世界とつながりつつ（「グローバル都市としての東京」）、グローバルシステムとしての中で東京が中心的結節点となっている社会言語学的環境において行われている。東京が世界のあちこちと繋がっている状況は、常にあらたな多様性を生み出し、同時に、解決されるべき挑戦や問題、対立も生み出している。「東京話者」は多様性を経験し、多様性と折り合いをつけるやり方を常に実践していかなければならない。したがって、コミュニケーションにおける「東京らしさ」は、単にある地理的領域（「23区」「東京都市圏」「大東京」）において用いられる特定の支配的言語体系（「東京語」）にのみ見出されるのではなく、異文化間コミュニケーションパターンと、他者と言語に対する柔軟で寛容な傾向にも見出される。東京では、あらゆる人がこうしたコミュニケーション上の特質と向き合わなければならない。そこでは言語能力の高低は問題とはならない。東京でコミュニケーションすることそれ自体が、あらゆる人になにかしらの影響を与えているのであり、地理的な意味での「東京」というくくりは、社会言語学的なくくりとしては不十分である。「東京らしさ」の中心と周縁、言語使用と行動における有標と無標、新しいタイプの話者と古いタイプの話者、といったようなことは、地理的区分によって単純に明らかにできることではない。東京的コミュニケーションを理解するためには、地域性や起源、ナショナルリティなどを必ずしも考慮する必要はない。東京的コミュニケーションの探求に必要なのは、ある種類の経験である。

東京の都市社会言語学にたずさわることが、東京を中心とする、多様化が進む地域間・国家間社会ネットワークに特有の言語的経験を研究することになるという傾向は強まっている。東京では、話者は予期せぬ言語的出会いや相互行為を柔軟に乗り越えていかなければならない。したがって、「東京話者」であることは、特定の社会的スキルであり、すべてのスキルがそうであるように、経験を重ねる必要がある（ちなみに、あるスキルに関する地理的な定義はほとんど意味がない）。社会言語学的に言えば、東京とは、「東京らしさ」が言語的に構築された状況であり、「東京らしさ」は相互行為の特定のやり方（特定の言

語体系、特定のコミュニケーションパターンやスタイル、言語や他者に対する特定の態度)に関する知識あるいは認識を意味する。ここで「知識」と「認識」を強調することは重要である。なぜなら、関与する者すべてがこうした特定のやり方において同様の水準にあるわけではないからである(例えば、かなり昔に地方から上京してきた者や、帰国してきた子供達、留学生などは、往々にしてこうしたやり方に疎い)。にもかかわらず、「東京らしさ」が付随するコミュニケーションに関わる者はすべて、遅かれ早かれ、東京において言語を用いてなにかを行う特定のやり方がどのようなかを認識するようになる。そして、どうにかして、自らのコミュニケーション行為をこれにあわせるように試みる。

以上、手短かに問題の輪郭を明らかにしたが、現在のところ、この種の社会言語学的調査が全般的に不足しているということは認めざるをえない。その原因は、東京に関する研究において、本節で概略的に述べた問いと視点が重要視されてこなかったこと、あるいは広くはみとめられてこなかったことにある。そこで、社会言語学的過程および社会言語学的経験としての東京にどのように取り組むかという議論に入る前に、社会言語学研究が対象としてきた「問題」や、これらの研究の方向性がどのように正当化されてきたか、さらに、これらの研究が日本の社会言語学研究に与えた影響について、概要を簡単に述べておきたい。これは、本稿での最終的な議論に必要な、社会言語学的・人口統計学的背景を提示することにもなるであろう。

## 2. 東京と第一の波

### 相関と分布の社会言語学

「古典的社会言語学」と呼ばれうる研究、あるいは最近になって「社会言語学の第一の波」(Eckert 2012, 2018)という用語で表現されるようになった研究は、「言語変種」と「社会的マクロカテゴリー」(年齢・ジェンダー・社会階層・宗教・エスニシティなど)を関係づけることによって、言語変種の意味を説明しようと試みたものである。言い換えれば、第一波社会言語学は、言語変種を、これらマクロカテゴリーによって生じるものとみなしていた。ある人が特定の話し方をするのは、そういう人だからだ、と考えられていた。例えば、「練馬

出身の労働者階級の中年女性であること」は「練馬出身の労働者階級の中年女性の話し方」をもたらす、というように。結果として、こうした相関を統計的な差異として論じるといった用心深い姿勢が一部に見られたとしても、全般的には、社会言語学は、社会的属性をあたかも個人から切り離すことができない永続的なものであり、個人はある種のスピーチ——ヴァナキュラー・スピーチ(Labov 1972)——を必ず予定通りに産出するものであるかのように言語変種を研究した。第一波社会言語学の二つ目の特徴は、「話者」よりも「言語」に焦点をあてたことであり、今度は、言語が特定の時間と空間に固定されているものとみなされた。そのため、ブロンマートは言語変種に対するこの種のアプローチを「分布の社会言語学」と呼んでいる(Blommaert 2010: 5)。日本の社会言語学は、方言学の強い影響下にあったため、この動向への追従が特に強かった(ましこ 2014; 徳川 1994)。方言学はまさに、時間と空間における言語変種の分布に関するものだからである。

東京の言語変種に関する研究は当初から、方言学の伝統とは別に、「国語問題」にも影響されていた。「日本語を問題として」みなすことは、日本の壮大な近代化事業と、国語としての日本語の確立への応答であったことを思い起こしたい。国語問題には二つの側面があった。一つ目は、言語コーパスと言語ステータスの問題に関わるものであり、話し言葉と書き言葉の統合、語彙の整備、標準語の選定・規範化・発展などである(飛田 2004; 田中 2001)。二つ目は、解放としての側面である。日本語が近代化のために用いられた最初の非西洋語であったことに留意することが重要である。このことによって、日本語の近代化の担い手たちは、「西洋語」のみが近代性を表現できるという西洋的視点の誤りを証明したからである。当時、ドイツの言語学者アウグスト・シュライヒャーによって提唱された「有機体としての言語」理論が支配的であり、この理論により、非西洋語は「文法的に貧弱」であり、近代的発展を支えることができないとみなされていた(Garvin 1993)。これら二つの側面の組み合わせ(言語問題と抑圧的西洋言語イデオロギー)は1945年以前の「国語問題」へのこだわり(平井 1998)と、言語の一体性のあくなき追求(Heinrich & Galan 2011)を生み出しただけでなく、日本語に対する西洋からの偏見への強力な対抗的イデオロギーを生み出した(イ 1996; ましこ 1997)。東京の言語に関する初期の研究は、こうした動向を反映している。

他の「世界的都市」や「グローバル都市」と同様、東京もまた多くの移民に

よって構成されているという事実は注目に値する。東京の場合、特徴的な大規模国内移民が二度生じている。一度目は東京の産業化過程において生じたものである (Hugh 1976)。これにより、千住から隅田川沿いにその更に北部と、南西部の多摩川沿い京浜地域の都市化がもたらされた。今日に至るまで、低所得世帯はこれら地域に集中している (菅野/佐野/谷内 2009 152-155)。これら移民の最貧困層は、スラムに定着した。明治期の東京には、よく知られたゲットーが三つ存在した (三大貧民窟)。都心西部の四谷区鮫河橋、南部の芝区新網町、北部の下谷区万年町がそれらである。当時の東京には言語的多様性や貧困、不平等があり、19世紀の終わり頃には、東京生まれの、いわゆる「江戸っ子」は東京の住民の中では少数派となっていた (Cybriwsky 1991: 73-75; Seidensticker 2010: 521)。東京への移民の数からすれば驚くべきことではないが、東京が抱える独特の社会的・地域的多様性と、言語の一体性と均質化へのこだわりがあいまって、移民と下層階級の言語的統合は当時の課題となっていた。二度目は、1960年代の高度経済成長期初期から生じ、バブル経済の終焉まで続いた。二度目においても、方言を標準日本語に「正す」という形での言語的同化が見られた。すべての「標準」でないものが、抑圧と根絶のために有標化された。これは下町ことばも対象とし、東京が拡張するにつれて、多摩方言もその対象とされた (杉本 2014: 309)。

ここでは「標準日本語」の展開や、それが当時の東京で話されていた社会的・地域的変種とどのような関係にあったかについての詳細は述べない (詳しくは真田 2001、杉本 2014を参照されたい)。とりあえずは、「標準日本語」が人工物であり、国語調査委員会の言語学者数名と明治期の小説家によって作り上げられたこと、また、その後の日本における話し言葉に大きな影響を与えたこと (安田 1999) を指摘するだけで十分であろう。明治初期には標準日本語を第一言語としている者は皆無であったが、それは東京の、ほとんどは山の手よりも西で、しばしば言文一致の文学作品を通じて集団的に学ばれていた (野村 2013; Inoue 2006)。東京東部の下町ことばの話し手は、この新しい言語ヘゲモニーの影響を強く受けた。というのも、下町ことばは「労働者階級」のことばとみなされるようになったからである。一方、想像上の山の手ことばの話し手は、「中産階級」とみなされるようになっていた (田中 1999: 94-96)。下町ことばの最も顕著な特徴は、無声声門摩擦音である /h/ が /ʃ/ と口蓋化することであり、このため /hito/ に対して /ʃhito/ (人)、/hibiya/ に対して /ʃhibiya/ (日比谷) といっ

た変化をもたらしていた。アクセントも異なっていた。山の手ことば (および標準日本語) では、saka (坂) は低-高アクセントだったが、下町ことばでは高-低アクセントであった。形態的にも異なり、山の手ことばでは「たーりない」であったのに対し、下町ことばでは「たーらない」であった。語彙についてもやはり異なっており、例えば、山の手ことばでは「ふるしき」であったが、下町ことばでは「ふるしき」であった。以上の例からも明らかなように、「東京ことば」は「標準日本語」へと奇跡の変容を遂げたわけではなく、東京の社会言語学的状況が均質だったこともなかった。東京ことばは、地域的社会的に階層化していたのである。東京での言語使用は「近代的生活」に適合しなければならず、これは、下町ことばや、多摩方言が、日本のその他の地域方言と同じようにみなされることを意味していた。標準日本語への交代は避けられないものとみなされていた (杉本 2014: 309)。実際に、東京の地域方言の活力は劇的に低下し、今日では絶滅の瀬戸際にある (東京都教育委員会 1986)。

日本における言語的マイノリティもまた、以上のような国内移民の潮流を通じて東京へ流入し、言語的エスニック的なコミュニティや居住地が東京で形成されるようになった。東京への最初の言語マイノリティ移民は、琉球における不況および食料危機と時を同じくして起こった。具体的には、沖縄史において一般的に「ソテツ地獄」として知られるものと同時期であった。琉球における悲惨な生活状況が原因となり、多くの労働者が日本本土の大都市へと渡っていった。また、1923年におきた関東大震災からの復興のために多くの労働者が必要とされていたことも要因の一つであった (復興の結果、東京の中心部は下町から山の手に移った)。後には、京浜地区の重工業に従事する琉球出身労働者からなる相当大きなコミュニティが鶴見に形成されている (Rabson 2012)。

1960年代には、二度目の移民とともに、以前よりも多くのアイヌがやってきた。そのほとんどは、東京北部の山谷のようなドヤ街や、多くのアイヌ女性が水商売に従事していた新宿区に定着した (Watson 2014)。筆者の管見の限り、日本の社会言語学はこうしたことを現在に至るまで全く研究してこなかった。おそらく、当時の日本の言語学において、「社会」に関することがタブー視されていたのが理由だろう (真田 2006: 1)。結果として、今日のわれわれは、5万人ほどの琉球出身移民と、アイヌを背景に持つ5千人以上の移民の言語生活に関する社会言語学的知見を持っていないのである。

東京への国際的移民ははるかに強い注意を引いた。紙幅の制約と、この分野

におけるすぐれた多くの研究（例えば、工藤／森 2015; 多言語化現象研究会 2013）があることから、ここでは詳細には立ち入らないが、初期の研究の焦点が学校教育と言語的同化であったことを指摘するだけで十分だろう。言い換えれば、移民の多言語使用や言語継承よりも、移民によって話される日本語の方がより注目を集めたということである。社会言語学的な側面に関する研究はようやく1990年代中盤になってあらわれている（国際日本語普及協会 1993; Maher & Yashiro 1995; 宮島 1995）。今日、東京には50万をこえる外国人が住んでいる。この話題については、おって触れることにしよう。

ここで、日本における都市社会言語学的话题に戻ることにしよう。クルマスは社会言語学を「これまでも現在も本質的に都市的なもの〔……〕産業都市社会の分析の中から現れ、またその分析のために現れたもの」（Coulmas 2017: 12）と述べている。これは欧米の伝統にはあてはまるが、日本の場合は異なる。日本において都市社会言語学が重要なテーマだったことは一度もない（真田／柴田 1982; 真田 1994, 1995, 2000を参照）。唯一の例外は、1970年代終盤および1980年代初頭の数年であり、当時は国立国語研究所における標準化に関する研究が最盛期を過ぎたが、「国際化」の社会言語学的側面についての研究はまだ始まっていない、という時期だった。

さて、「都市化」は1970年代における社会科学の重要なキーワードであった。というのも、日本における急激な都市化は、インフラから公害、さらには共同体生活までの範囲において、重大で前例のない多くの問題を引き起こしつつあったからである。1887年に出版されたテンニースの古典的研究『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』（共同体と社会）<sup>1</sup>は、早くも1927年に日本語に翻訳されている（テンニース 1927）が、これになぞらえれば、（八丈島、白川、岡崎、鶴ヶ丘などの）農村部における「共同体の社会言語学」から「社会の社会言語学」への転換が試みられたと言えるだろう。この種の最初の研究は、標準日本語と方言の関係をさぐる大規模調査であり、大阪と東京において、標準日本語と方言それぞれに対する態度を研究するものであった。しかし、インフォーマントの多くが実際は方言話者であり、大都市においても身近で親密なネットワークを持っていたため、都市における言語生活は農村部におけるものどどのように異なるのかという明確な見取り図は提示されなかった（国立国語研究所 1981）。

その後に行われた二つ目の大規模調査は、日立製作所などでの言語生活に関

するものであり、会社組織の職階と、職階の敬語使用への影響に特に注目するものであった。この調査でも、記録された言語使用は予想されたほど特徴があるものではなかった。あらゆる職階の従業員間で頻繁で身近なやりとりがあったが、大部分は親密性が反映された言語使用という結論に落ち着いてしまった（国立国語研究所 1983）。これら二つの大規模で入念な調査から得られた新しい視点がそれほど多くなかったことを考えると、これらの調査がその後の日本の社会言語学の発展にほとんどインパクトを与えなかったことは不思議ではない。都市社会言語学の伝統は発展せず、今日、東京に関する研究の多くは、過去の言語状況に関する文献学的アプローチにとどまっている。もちろん、注目に値する例外もある（例えば、Backhaus 2007; 山下 2016）。

国立国語研究所が都市言語の研究、具体的には東京都市圏の話言葉について取り組むまでには40年が必要だった（国立国語研究所 2013）。「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」という包括的タイトルのもと、四つの異なるプロジェクトが一つの報告書にまとめられた。個々のプロジェクトは、(1) 首都圏大学生の言語使用と言語意識の地域差に関する調査、(2) 東京のことばに関する研究者インタビュー、(3) 首都圏の言語に関する研究文献目録、(4) 東京語アクセント資料の電子化、である。プロジェクト全体は、第一波社会言語学の顕著な特徴である二つの見方に基づいている。一つは、古典的なマクロ変数とその組み合わせ（出身地と年齢）が言語的バリエーションおよび言語意識のバリエーションの理由であるという見方、二つ目は地理的空間を特に強調する見方である。後者は少々珍しい。なぜなら、都市状況におけるバリエーションを理解するためには、「語られない言語的変種や混交が小規模な都市の広がりにも存在する以上、過去に方言学者がしたように、地理的空間を多様性に関する最も顕著で意味がある次元と見なすことはもはや不可能である」（Coulmas 2017: 12）ことが理解されつつあったからである。この都市社会言語学プロジェクトにくむべきところはあるものの、基本的には地方における方言学をグローバル化した都市に適用したものと見える。

調査から一つの例を見てみよう。東京都と埼玉県に立地する8つの大学の学生を対象に、35の言語表現について、「言う」「聞いたことがある」「聞かない」のいずれかを、携帯電話を使って回答してもらうものである。学生には、5歳から15歳までの間の最長居住地もたずねており、これを生育地として回答が地図上に記されていく。最初の質問は、標準日本語では「片付ける」とな

る、「カラス」という関東方言についてである。圧倒的多数の96%がこの表現を知っており、75%がよく使うと回答している。「カラス」という表現は一度は使われなくなったが、東京都市圏の学生の間では知られ使われている。古い関東方言が復活しているということになるが、その使用／非使用を学生の生源地によって本当に説明できるのだろうか。基本的には関東方言は一旦衰退しているのだから、学生の間での「カラス」の広がりや「話し言葉のスタイル」のあらわれではあっても、「地域ことば」のあらわれではない。この話し言葉のスタイルはもちろん地理的基礎をもっていることであろう（どこでもない場所では発展できないのだから）。しかし、社会的ネットワーク、ジェンダー、社会階層、通った学校の種類、などのほうがはるかに大きなインパクトを与えた可能性がある。たとえば、この表現を使うことで学生たちは自分の「関東性」を示したがっている、と考えることは難しい。この事例の場合、もし、消えつつあることばを復活させることが「自分がなりたいもの」を示している、と考えるとすれば、少々独創的にすぎるだろう。残念ながら、「カラス」が社会的に示すものがなにかはわかっておらず、今日の東京の大学生の間で、どのような相互作用が働いているのかもわからない。しかし、そうした知識がなければ、社会言語学的な「動向」を発見することはまず不可能である。都市社会言語学には、それに見合った質問項目と調査方法が必要なのだが、このプロジェクトにはそれが欠けている。

「都市社会言語学」は、「たまたま都市になった」空間における言語データを研究するものではない。意味のある結果を引き出すためには、都市的コミュニケーション（導入部参照）の理解が必要となる。この節を閉じるにあたり、現在の都市社会言語学の枠組みにおいて東京をどのように研究できるかという議論に立ち戻ることしよう。そのためには、第二波と、わけても第三波社会言語学が有益な出発点を提供してくれる。

### 3. 東京と第二波および第三波社会言語学

#### ローカルな意味と移動の社会言語学

まず、第二波社会言語学のアプローチについて見てみよう。社会言語学は

1990年代に、社会的マクロカテゴリーからローカルな意味およびカテゴリーへと立ち戻りはじめた。言い換えれば、第二波は社会言語学に再び「エスノグラフィ」をもたらしたのである。研究対象となっている言語の話者にとって、意味があるカテゴリーとその役割とはなにか？ ローカルなダイナミズムとはなにか、そしてそこに参加する話者によってそれがどのように受け止められているのか？ 第一波のアプローチには（西洋でも日本でも）こうしたローカルな差異や意味が不在だったことは見たとおりで、実際には、若者、男性、女性、学生、既婚者、パート労働者などであることの意味は、人や場所によって大きく異なる。例えば、「日本で若者であること」は「イタリアで若者であること」とはなにかしら違うことを意味するし、それはメタ言語、つまり、年齢に関するイーミック<sup>2</sup>なカテゴリーに反映される（Heinrich & Galan 2018）。「二十代」に相当するイタリア語の表現はなく、イタリア語の「prima età adulta」（第一成人期、22歳から39歳）や「seconda età adulta」（第二成人期、40歳から59歳）に該当する確立された日本語表現もない。言語的バリエーションを説明するイーミックな概念への立ち戻りが第二波社会言語学の主要な貢献であった。たとえば、多岐にわたる様々な日本のジェンダー役割と個人の性的指向に関するイーミックな視点は、言語的バリエーションの研究にとって、「性別」という生物学的概念よりもはるかに意味がある。東京都市圏の学生の例について再び考えてみると、第二波社会言語学の観点からすれば、次のような問いを立てることができたはずである。東京の日本人大学生は、お互いを言語的にどのように区別しているのか？ 自分自身をどのように区別しているのか？ 若者の間での言語的バリエーションの説明のために「大学生」というカテゴリーは有効か？ また、下位種はあるのか？ 国公立大学の学生と私立大学の学生の違いはあるのか？ 偏差値が高い大学と低い大学との間に違いはあるか？ 理系と文系では？ これらの変数は交差するのか？ 最初にエスノグラフィックな観察を行い、それを言語と関係づけなければ、こうした問いのいずれにも答えることができない（ちなみに、柴田武のような言語生活に関する戦後のパイオニアらは、この点について非常に長けており、ある種の第二波社会言語学を先駆的に行っていた）。加えて言うなら、学生にとって本当に「意味がある場所」とはなにか？ 20年前に筆者が東京で学生だった頃、池袋をぶらつくこと、新宿をぶらつくこと、渋谷をぶらつくことにはそれぞれ全く異なる意味合いがあった。例えば、池袋を「本拠地」とすることは、丸の

内では決してぶらつかないという意味でもあった。今日の東京で学生にとって意味がある境界線はなにか？ 学生たちにとってそれはなにを意味しており、どういう言語使用と関係しているのか？これが第二波アプローチにおいて重要なことであり、千葉で育ったか神奈川で育ったかは重要ではない。コミュニティと言語というテーマについて話者自身が知っている話者自身のことを調査するのが第二波アプローチである。

次に、東京の研究にとって第三波社会言語学がなし得たであろう貢献について考えてみよう。第三波を最も単純に表現するなら、言語的バリエーション（とその意味）と話者の関係を根本に据えるもの、となる。先に「練馬出身の労働者階級の中年女性であること」は「練馬出身の労働者階級の中年女性の話し方」をもたらすという例で示したような第一波とは異なり、言語を中心に置くことで話者が遠ざけられるということはなくなった。第三波アプローチには、あたらしい点が二つある。一つ目は、話者を言語の「受動的担い手」ではなく、言語をつうじて自らを構築し表現する能動的なエージェントとみなすことである。二つ目は、意味を「固定された静的なもの」ではなく、話者と文脈に応じて変化する潜在的な意味範疇（いわゆる「複指標性」）(Eckert 2003: 453) ととらえることである。例えば、「東京の男性のスピーチ」は日本各地で異なった受けとめをされ、大阪のような場所では「やさしく女性的」なものと受けとめられる (Okamoto & Shibamoto-Smith 2016: 255)。言い換えると、どこでも同一であるかのように考えられがちな「男性的役割」一つをとっても、異なる場所と文脈においては、異なって理解されるということである。意味は安定しておらず、その場の文脈においてのみ意味をなす。だからこそ、個人が操る言語は、個人の生活史によって決定され形づくられる。個人は、予見が難しい変化する特定の文脈において特定のなにかを行うために、自分が持つ言語レパートリーによって社会的役割と関係を構築する。これが今日の都市社会言語学において支配的な見方である (Blommaert 2010; Eckert 2018; Pennycook and Otsuji 2015; Smakman and Heinrich 2017)。こうした研究は終わることがない。というのも、都市における言語を総体として「とらえる」ことは決してできないからである。ポストモダン都市における言語は、移動性・複雑性・非予見性によって特徴づけられる (Blommaert 2013: 6)。「動向」を予見するために「現状の調査」を通じて言語的バリエーションをとらえようとすることは、東京のような場所にみられる社会言語学的状況を全般に単純化することになる。東京はポストモダン

世界の重要な中心地であり、固定化された関係やつながり、予想や動向は役に立たなくなった。言語と社会は液状化した (ハインリッヒ/石部 2016) のであり、21世紀の社会言語学には、こうしたポストモダンの生活へとその方法を適合させることが求められている。

国民国家は、文化と言語において常に、その自画像をはるかに越えて多様であった。本号で20冊を数える『ことばと社会』に見られるように、日本も例外ではない。この多様性が大都市ほどよくあらわれている場所には他にはない。東京における現時点での外国人住民の数は、1873年当時の東京の人口である60万人とほぼ同じである。さらに、継続する観光ブームや、東京のような世界都市を故郷のように感じる精神的なグローバルエリートの出現もあいまって、日本の他の場所には存在しないような特有の社会言語学的状況が東京にはある。都市生活と文化は、ナショナルイズムの想像とは常に異なるものであったが、今日では、社会言語学的状況とナショナルイズムの想像との隔たりが急速に拡大している。日本において、東京はこの動向の最先端にあり、だからこそ、日本の社会言語学が都市社会言語学研究に取り組むことが必要なのである。東京はたんに「多様」なのではなく、「超多様」となっている。別の言い方をすれば、「多様性が多様化しつつある」(Vertovec 2007)。たとえば、東京の在日朝鮮人は、もはや「エスニックな地区」に住む「下層階級」ではない。在日は、あらゆる場所に住み、あらゆる社会的空間に見出される。収入や職業、将来への希望、言語的レパートリーやアイデンティティは多岐にわたる。第三波社会言語学に取り組むことは、「多様性の海に正面から飛び込む」ことであり、人々がどのように日常生活を切り抜け、それが人々にとってどのような意味を持つかを目にすることである。これらのどれひとつとして、第一波の伝統である「分布の社会言語学」ではとらえることができない。

第三波社会言語学は、(行政区域としての!) 東京だという理由で、人々がある予見可能な発話方法をとる、という見方を出発点としない。東京人は、東京に特有の暗示的文脈と意味を創造する、相互につながり移動する能動的エージェントとみなされる。人々は「東京している」のである。「東京している」のは、言語についてだけではない。それは東京の生活様式の一部であり、学際的方法が都市社会言語学に最も適している理由でもある。東京のようなグローバル都市は、グローバル化した知識経済と文化経済によって特徴づけられている。そうした経済状況の特質は、標準化・規範化から唯一性・独自性への移行

である。現代の東京は、自身の唯一独特なライフスタイルを「企画展示」する人々であふれている。これは物質的か非物質的にかかわらず、生活のあらゆる面においてあらわれている。東京では、(服装、友情、食料、食品、家具、建築など)、あらゆるところに非一標準化と非一規範化が見いだせる。さほど驚くことではないが、言語もそうである(例えば、新東京方言、標準日本語のくだけた使用、方言コスプレ、SNS等における「ガラバゴス現象」、コードスイッチング、外国なまり、第二言語話者バリエーション、多言語や混成言語による看板など)。東京でこうしたことを日々経験する人々は、それを生きる方法を学び、大概は東京生活を楽しんでいる。流動性やあいまいさ、非予見性を適切に評価しつつ、現代の東京のライフスタイルに随伴するこの種の言語生活についての研究方法を学ぶことが必要である。筆者は、東京のようなポストモダン空間は、言語的過程と言語的経験に関して最もすぐれた研究対象ではないかと考えている。その理由について述べて、本稿を閉じることにしたい。

#### 4. 結論 社会言語学的過程と社会言語学的経験としての都市

周縁化された集団に注目し、日本の多様性を認めることは、現在の日本の社会言語学の「主流」である。領域や時代に言語を固定する分布の社会言語学はもう機能していない。であれば、「日本の社会言語学で、次に来るものはなにか」という問いがうかびあがってくる。今日の日本社会は主として都市社会であり、東京が世界最大の都市だという事実は、ポストモダンの都市社会言語学に取り組む十分な理由を告げている。なすべきことは複雑であり、第二波と第三波のアプローチ(第二波の知見に基づかなければ第三波のアプローチはとれない)によるあたらしい多くの事例研究に取り組む以外、東京における都市社会言語学の研究を始める方法はない。

東京はあいまいであり、そのあいまいさを受け入れるだけでなく、そのあいまいさに基づいた研究計画を立てなければならない。こうした文脈では、あたらしいタイプの話者や学習者、言語所有のさまざまな度合い、ポリランゲージングやトランスランゲージング、ランゲージクロッシングがひろく観察される。そうした状況では、「個別の話者」の方が「スピーチコミュニティ」というフレームワーク概念よりも重要となる。さまざまな話者集団はさらに多様化

し、結果として、社会言語学調査は、個別の「言語レポーター」に注目せざるをえなくなる(Blommaert & Backus 2013)。この種の調査は日本の社会言語学ではまだ目立たないが、わずかながらも先駆的事例研究が存在する(Otsuji 2015など)。これらは、東京における都市社会言語学にどのように取り組むべきかという重要なモデルである。

都市は多声的であり、増加する予見困難な個人によって作りだされた「言語」の断片から構成されている。その総体において、これらの声は、各都市で異なる「響き」と化す。個人の経験は、個別の集団に結実する。過去150年間、東京は言語的同化によって特徴づけられてきたかもしれないが、その同化は決して完了することがなかった。その痕跡は、言語や態度に残されている。東京の過去が痕跡を残したのは、東京の多様性が東京に特有のさまざまな機能を果たしてきたからだ。結果として、移民から構成されるその他の大都市(ニューヨーク、パリ、カイロ、ドバイ)と同様、東京は今日、独自の響きを有している。過去の言語状況は東京にある種の構造をもたらしたが、だからといって指揮者や譜面があるわけではない。言い換えると、そこには「実態」も「動向」も存在しないのである。響きは日々あらたに作り出され、それゆえに、毎日少しずつ異なっている。しかし、まったく異なるわけでもない。個人は、過去に東京に住み、東京の言語的風景に痕跡を残した人々の経験を引き継いでいるのであり(カラス!)、過去の経験に基づかなければあたらしいものを作り上げることができないからだ。都市が社会言語学的過程および社会言語学的経験となるのは、これが理由である。これを研究することは、歴史的過程とその遺産という二つの側面と、それらが日々の経験と擦り合わされている現在とに焦点をあわせることである。現在の経験はそれまでの経験の上に積み重なり、結果として過去に一層の深みを与えるのだから。「東京の響き」を構築する言語的材料はなんなのか? 東京で「よそ者都会人」が知り合うに従ってそれがどのように用いられ変化したのか? そして毎日お互いにどうやってうまくやっていくのか? こうしたことを知る術は、現在の東京における都市言語生活に関して、第二波と第三波の研究をすすめる他にない。同時に、こうしたマイクロ要素は、より大きな特定の東京の響き(サウンド)——実際には耳にすることは決していないが、なにかしらの「東京する」経験を持つ者すべてにとってなじみがある——の一部であることを忘れてはならないだろう。



## ■注

- 1 テンニースの主著は、日本語では『ゲマインシャフトとゲゼルシャフト』、或いは初訳時の標題『共同社会と利益社会』として知られているが、英語ではCommunity and Societyという標題で訳されている。
- 2 イーミック (emic) は文化固有的なカテゴリである。それに対して、エティック (etic) は普遍的なカテゴリを示す。これらは、phonemic (音韻) と phonetic (音声) という用語に基づき、バイクによって考案された。

## ■参考文献

- イ・ヨンスク (1996)『「国語」という思想——近代日本の言語意識』岩波書店。
- 北本朝展 (日付なし)「宇宙から見た夜の地球」<http://agora.ex.nii.ac.jp/~kitamoto/research/rs/world-lights.html.ja> (2018年7月5日閲覧)。
- 工藤真由美/森幸一 (編) (2015)『日系移民社会における言語接触のダイナミズム』大阪大学出版会。
- 国立国語研究所 (1981)『大都市の言語生活』三省堂。
- 国立国語研究所 (1983)『企業の中の敬語』三省堂。
- 国立国語研究所 (2013)「首都圏の言語の実態と動向に関する研究」<http://pj.ninjal.ac.jp/shutoken/> (2018年7月17日閲覧)。
- 国際日本語普及協会 (1993)『日本に定住したインドシナ難民の母語の保持と喪失に関する調査研究：報告書』国際日本語普及協会。
- 真田信治 (1994)『日本における社会言語学的研究文献リスト (1982-1986)』大阪大学文学部。
- 真田信治 (1995)『日本における社会言語学的研究文献リスト (1987-1992)』大阪大学文学部。
- 真田信治 (2000)『日本における社会言語学的研究文献リスト (1993-2000)』大阪大学文学部。
- 真田信治 (2001)『標準語の成立事情——日本人の共通ことばはいかにして生まれたか?』(PHP文庫)、PHP研究所。
- 真田信治 (2006)『社会言語学の課題』くろしお出版。
- 真田信治/柴田武 (1982)『日本における社会言語学の動向』個人出版。
- 菅野峰明/佐野充/谷内達 (編) (2009)『首都圏 I (東京都・神奈川県・埼玉県・千葉県)』(日本の地誌 5)、朝倉書店。
- 杉本つとむ (2014)『東京語の歴史』(講談社学術文庫)、講談社。
- 多言語化現象研究会 (編) (2013)『多言語社会日本——その現状と課題』三元社。
- 田中章夫 (1999)『日本語の位相と位相差』明治書院。
- 田中章夫 (2001)『近代日本語の文法と表現』明治書院。
- テンニース、フェルディナント (1927)『共同社会と利益社会』井森陸平 (訳)、巖松堂書店。
- 東京都教育委員会 (1986)『東京語言語地図』東京都教育委員会。
- 徳川宗賢 (1994)「方言学から社会言語学へ」『阪大日本語研究』6、1～28頁。
- 飛田良文 (編) (2004)『国語論究 11 言文一致運動』明治書院。
- 野村剛史 (2013)『日本語のスタンダードの歴史——ミヤコ言葉から言文一致まで』岩波書店。
- ハインリッヒ、パトリック/石部尚登 (2016)「第三の波の社会言語学におけることばとアイデンティティ」、『ことばと社会』編集委員会 (編)『ことばと社会』18号 (特集：アイデンティティ研究の新展開)、4～10頁。
- 平井昌夫 (著) (1998 [1948])、安田敏朗 (解説)『国語国字問題の歴史』三元社。
- ましこ・ひでのり (1997)『イデオロギーとしての「日本」——「国語」「日本史」の知識社会学』三元社。
- ましこ・ひでのり (2014)「日本の社会言語学はなにをしてきたのか。どこへいこうとしているのか。——「戦後日本の社会言語学」小史」『社会言語学』第14号、1～23頁。
- 宮島達夫 (1995)「多言語社会への対応——大阪：1994年」『阪大日本語研究』7、1～21頁。
- 安田敏朗 (1999)『「国語」と「方言」のあいだ——言語構築の政治学』人文書院。
- 山下里香 (2016)『在日パキスタン人児童の多言語使用——コードスイッチングとスタイルシフトの研究』ひつじ書房。
- Backhaus, Peter (2007) *Linguistic Landscapes: A Comparative Study of Urban Multilingualism in Tokyo*, Clevedon: Multilingual Matters.
- Blommaert, Jan (2010) *The Sociolinguistics of Globalization*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Blommaert, Jan (2013) *Ethnography, Superdiversity and Linguistic Landscapes: Chronicles of Complexity*, Bristol: Multilingual Matters.
- Blommaert, Jan & Ad Backus (2013) “Superdiverse Repertoires and the Individual”, Ingrid de Saint-Georges & Jean-Jacques Weber (eds.) *Multilingualism and Multimodality: Current Challenges for Educational Studies*, Rotterdam: Sense, pp.11-32.
- Coulmas, Florian (2017) “Urbanisation and Linguistic Multitude”, Dick Smakman & Patrick Heinrich (eds.) *Urban Sociolinguistics: The City as a Linguistic Process and Experience*, London: Routledge, pp.12-24.
- Cresswell, Tim (2004) *Place: A Short Introduction*, Malden: Blackwell.
- Cybrirsky, Roman (1991) *Tokyo: The Changing Profile of an Urban Giant*, London: Belhaven Press.
- De Certeau, Michael (1988) *The Practice of Everyday Life*, Berkeley: University of California Press.
- Deprez, Christine (2017) “The City as a Result of Experience: Paris and its Nearby Suburbs”, Dick Smakman & Patrick Heinrich (eds.) *Urban Sociolinguistics: The City as a Linguistic Process and Experience*, London: Routledge, pp.148-161.
- Eckert, Penelope (2003) “Elephants in the Room”, *Journal of Sociolinguistics* 7(3), pp.392-431.
- Eckert, Penelope (2012) “Three Waves of Variation Study: The Emergence of Meaning in the Study of Sociolinguistic Variation”, *Annual Review of Anthropology* 41, pp.87-100.
- Eckert, Penelope (2018) *Meaning and Linguistic Variation: The Third Wave in Sociolinguistics*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Garvin, Paul L. (1993) “A Conceptual Framework for the Study of Language Standardization”,

- International Journal of the Sociology of Language*, 100/101, pp.37-54.
- Heinrich, Patrick & Christian Galan (eds.) (2011) *Language Life in Japan: Transformations and Prospects*, London: Routledge.
- Heinrich, Patrick & Christian Galan (eds.) (2018) *Being Young in Super-Aging Japan: Formative Events and Cultural Reactions*, London: Routledge.
- Hugh, Patrick (1976) (ed.) *Japanese Industrialization and its Social Consequences*, Berkeley: University of California Press.
- Inoue, Miyako (2006) *Vicarious Language: Gender and Linguistic Modernity in Japan*, Berkeley: University of California Press.
- Labov, William (1972) *Sociolinguistic Patterns*, Philadelphia: University of Pennsylvania Press.
- Maher, John C. & Kyoko Yashiro (1995) *Multilingual Japan*, Clevedon: Multilingual Matters.
- Marshall, John U. (1989) *The Structure of Urban Systems*, Toronto: University of Toronto Press.
- Okamoto, Shigeko & Janet S. Shibamoto-Smith (2016) *The Social Life of The Japanese Language: Cultural Discourse and Situated Practice*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Otsuji, Emi (2015) "Metrolingual Tokyo: C'est un Peu Difficile, mais it's very Fan desu yo", Ikuko Nakane, Emi Otsuji & William S. Armour (eds.), *Languages and Identities in a Transitional Japan: From Internationalization to Globalization*, London: Routledge, pp.101-120.
- Pennycook, Alastair & Emi Otsuji (2015) *Metrolingualism: Language in the City*, London: Routledge.
- Rabson, Steve (2012) *The Okinawan Diaspora in Japan: Crossing the Borders Within*, Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Seidensticker, Edward (2010) *Tokyo from Edo to Showa 1867-1989: The Emergence of the World's Greatest City*, Rutland: Tuttle.
- Sennett, Richard (1969) *Classic Essays on the Culture of Cities*, New York: Appleton-Century-Crofts.
- Simmel, Georg (1971 [1903]) *The Metropolis and Mental Life*, New York: Free Press.
- Smakman, Dick & Patrick Heinrich (eds.) (2017) *Urban Sociolinguistics: The City as a Linguistic Process and Experience*, London: Routledge.
- Vertovec, Steven (2007) "Super-diversity and its Implications", *Ethnic and Racial Studies* 30.6, pp.1024-1054.
- Watson, Mark K. (2014) *Japan's Ainu Minority in Tokyo: Diasporic Indigeneity and Urban Politics*, London: Routledge.